

二〇二四年度 一般入学試験前期日程(二月一日) 問題〔国語総合〕

大問一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

境界知能の歴史的背景についてご説明します。知的障害の診断には、DSM・5(精神障害の診断・統計マニュアル第5版)が用いられることが多いですが、自治体によっては障害者手帳用の診断書には、ICD(国際^a疾病分類)という世界^bホケン機関(WHO)が作成した分類が用いられることもあります。

最新のDSM・5ではIQの区分がなくなりましたが、ICDでは、IQが70未満(自治体によっては75未満)で、さらに社会適応レベルに障害があれば知的障害と診断されます。IQが70から85の領域(IQ値は平均100で1標準偏差「SD」が15と設定。平均100から1SD、2SDのところ)は境界知能とされます。境界知能は計算上、約14%存在することになり、例えば、35人クラスなら、約5人いることになります。

(i) ICDは定期的に改定されています。1965年から1974年までの10年間は第8版(ICD・8)として、IQ:70～80は「境界線精神^cチタイ(Borderline Mental Retardation)」と定義されていました。つまり、今でいう知的障害です。その10年間だけは、境界知能までが知的障害だと扱われていたのです。つまり境界知能であれば、知的障害者と同様にこの社会で生活するのが大変だということを示しているのです。現に、米国的・発達障害協会が発行している定義マニュアル(第11版)にはIQが70～75をわずかに下回る軽度知的障害とIQが70～75をわずかに上回る人、つまり境界知能は共通点が多いと記されています。

では、どうしてIQ70まで下がったかという点、あまりにも該当する人口が多すぎるためさまざまな不都合が生じたからでしょう。現在の日本の人口で考えてみると、14%であれば1700万人以上の境界知能の方が知的障害に該当してしまいます。1700万人を知的障害者として支援するのは、財政面でも人材面でもとても現実的ではありません。

(ii)、ここで考えてみてください。基準値が下げられたからといって、この人たちが知的障害者ではなくなったわけではありません。依然として①彼らの大変さは残ったままのほうです。ではどうなったのでしょうか。気づかれず、忘れられてしまったのです。1999年の米国大統領精神^cチタイ委員会の報告書の中でも「忘れられた世代」として報告されているほどです。

ではIQ70未満であれば気づかれるのでしょうか。知的障害者は、知的障害という診断がつけば当然支援を受けることができます。しかし知的障害であっても気づかれないこと

も多々あります。知的障害は約2%いるとされていますが、内閣府の『障害者白書』（令和3年版）によりますと知的障害者は109万人、つまり0・87%。半数以上が認定されていないのです。

一方で平成25年の『障害者白書』では54・7万人でした。8年で約②万人増加していることになるのですが、これは知的障害に対する認知度が高まり、療育手帳取得者が増加した結果だといえます。

知的障害者の事件で印象深いのが、2003年、滋賀県のある病院で起きた死亡事件です。入院していた植物状態の男性患者（当時72歳）が死亡し、滋賀県警は、人工呼吸器のチューブがはずれたことを報じるアラーム音に、当直の看護師らが気づかず窒息死したとみて、過失致死事件として捜査しました。

事件から1年以上経ったころ、任意聴取された元看護助手Aさんが、驚くべき自白をしました。「職場での待遇への不満から、呼吸器のチューブをはずした」というのです。Aさんはすぐに逮捕され、殺人罪で懲役12年が確定しました。しかし服役すると一転、Aさんは獄中で冤罪を訴え続けたのです。やがて、服役後の2020年の再審判決で、Aさんは無罪となりました。

(iii)、Aさんはd虚偽の自白をしたのでしょうか。それは、取り調べの刑事を「優しい男性」と思い込み、③を抱いてしまったからなのです。Aさんは自分が罪を認めることで、その刑事から好かれると思っただけです。Aさんは、のちに軽度の知的障害と発達障害の疑いありと診断されています。服役していたAさんに弁護団は面会を何度も重ね、その中で精神eカンテイを行いました。そのときようやく軽度の知的障害があることがわかったのです。それまでは、Aさんの障害は気づかれなままでした。

Aさんの兄2人は勉強ができる優秀な人で、Aさんは劣等感を感じながら生きてきました。Aさんにとっては、嘘をつくことが、友だちや周りの人とうまくやっていき、生きるための手段だったのではないかと思います。

冤罪はもちろん大きな問題ですが、一方で小中学校ではAさんに知的障害があるということが、全く気づかれていなかったことが大きな問題と感じます。報道によると、Aさんの中学校の先生は、Aさんの知的障害に気づいてあげられなかったことを後悔されていたそうです。

(宮口幸治『立方体が描けない子』の学力を伸ばす)

※設問のために一部改変

問い一 傍線部a～eそれぞれについて、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問い二 傍線部①彼らの大変さは残ったままのはずですとあるが、「彼ら」とは誰を指すか。その答えとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア I Qが85をわずかに上回る人
- イ I Qが70～75をわずかに下回る人
- ウ I Qが70未満の人
- エ I Qが70から85の人

問い三 ②に当てはまる数として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 35
- イ 45
- ウ 55
- エ 65

問い四 ③に当てはまる語として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 好意
- イ 悪意
- ウ 敵意
- エ 害意

問い五 (i)(ii)(iii)に当てはまる語として最も適切なものをそれぞれ次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ところで
- イ なぜ
- ウ しかし
- エ なぜなら

問い六 本文には、次の文が抜けている。この文が入る適切な箇所の直前の文の終わりの九字を書き抜きなさい。なお、句点も一字に含める。

しかし依然、気づかれていない知的障害者が大勢いることに違いはありません。

大問二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

失敗の総ては統率の至らなかつた事と自らを耻ぢは（ママ）自らを責め、一切沈黙を守つて只管英靈ひたすらに熱禱ねつとうを捧げてその冥福を祈り、遺族の安泰を念願して今日に至つた。

①

その男とは陸軍中将・牟田口廉也のことだ。冒頭の言葉も彼のものである（牟田口廉也「インパール作戦回想録」）。日本陸軍に興味を持つ者なら、牟田口廉也を知らない、ということはないだろう。彼は陸軍の主要な戦いで大きな功績をあげながら、インパール作戦での敗将というイメージに自らを埋没させた軍人である。

インパール作戦（「ウ」号作戦）は、第二次世界大戦のビルマ戦線において、昭和十九年（一九四四年）三月に日本陸軍が開始した作戦である。詳細は後述するが、ビルマの防衛や「援蔣ルート」の撲滅等を目的として、英領インド北東部の都市インパールの攻略を目指した。しかし様々な理由から作戦は失敗し、七月に日本軍は撤退する。その過程で約三万人の死者を出した悲惨な作戦としても知られる。牟田口は本作戦の指揮を執つた。

牟田口廉也の名に接する時、名将や仁徳の将などといったポジティブなイメージを抱かせることは少ない。むしろ世の人々に無分別な指揮官などと感じさせるのではないだろうか。また、その感情とは別に、彼に対する失望や激憤が持たれる場合すらあるだろう。

②

しかし、負け戦を指揮した者は他にもたくさんいる。むしろ牟田口はそれまで「常勝將軍」と呼ばれ、多大な戦果を挙げていた。かつては陸軍を代表する勇将、あるいは猛将ほまれの誉に相応ふさわしい人物と思われていたのだ。

また、任務とは指揮官の活動の根源であるが、それを与えることができるのは、上級部隊指揮官しかない。よってインパール作戦で、その責めを負うべきなのは牟田口の上に立つビルマ方面軍司令官、つまり河邊正三中将である。それは河邊も認めているところだ。

③

詳しくは序章に譲るが、日本陸軍では、任務をことさら重視した。任務を放棄した指揮官は愚か者か卑怯者ひきょうと呼ばれた。任務は指揮官と部隊に生命を吹き込む。つまり、任務の遂行が組織の存在意義を成り立たせているのである。

④

加えて、牟田口が自らに与えられた地位・役割から任務を積極的に遂行しようとしたことは、誰にも否定できまい。指揮官には「統率」があるように、部下・参謀には「補佐道」が

ある。牟田口もそのキャリアの多くにおいて補佐道を歩み己を殺し、指揮官の威徳の発揚に精力を注いできた。

⑤ それは黙って指揮官の言いなりになる、という意味ではない。確かに強力なリーダーシップを発揮する指揮官に対しては、言われたことを順守する。命じられれば黙して死地へ赴くこともある。ただし指揮官が誤っていると確信する場合は、身を挺してでも諫める勇気が必要だ。

⑥ その一方でリーダーシップを十分に発揮できない指揮官に対しては、指揮官あるいは部隊にとって最も良い選択肢を無心で推し進めるのである。なぜなら彼らは大元帥と言われた天皇の赤子の命を預かり、尊い犠牲により任務を達成する者たちだからだ。文字通り全身全霊をかたむけて戦務に臨まなくてはならない。生死の境を彷徨う中、我欲などは消え失せてしまうのだ。よってその良し悪しは措き、現代の感覚とは大きく異なるのも当然だ。

指揮官の統率と部下・参謀の補佐道の関係は極めてデリケートな問題だ。正解などない。また指揮官は部下を選べるが、部下は指揮官を選べないとはよく言われる言葉である。そのため部下、参謀が指揮官の統率に己の補佐道を合わせるのが正論ではないだろうか。

⑦ 任務の遂行には、感情の評価が入り込む余地など存在しない。あるのは任務達成か否かの二つだけである。また軍事の領域では「戦場の霧」と例えられる偶発的な要素が介在し、必ずしも合理的な判断だけでは勝敗の決着がつかない場合もある。よって、作戦の結果だけをもって指揮官の賢愚をあげつらうべきではないことを我々に教えている。

⑧ ただ当時の天皇は現人神と認識されており、牟田口の精神的支柱になっていたとしてもおかしくない。ましてや、こうした行動をとったからと言って、任務遂行に手を抜いていたと言えるのか。少なくとも牟田口の置かれた特殊な環境を明らかにし、そこには何か他の意味があったと考えるべきではないだろうか。

(関口高史『牟田口廉也とインパール作戦 日本陸軍「無責任の総和」を問う』)

※設問のために一部改変

問い一 次のア～オの各段落は、本文中の①～⑧のどこに入れるのが最も適切か。それぞれ番号で答えなさい。

ア そして陸軍では、参謀あるいは隷下部隊の指揮官は自らが所属する部隊の成功によつてのみ評価される。部隊の成功は指揮官の「意思の実現」と置き換えることができる。指揮官の意思をどのように実現するか、それは牟田口が常に考え、自身が指揮官となった際には参謀や部下たちへ求めたものに他ならない。

イ なぜ、このように牟田口に対する評価は低いのか。インパール作戦で第十五軍司令官として多くの戦没者を出し、負けたことを責めているのだろうか。確かに作戦の全ての責任は指揮官、唯一人しか負うことができない。

ウ その男は自らを責め、沈黙していた。しかし男を取り巻く環境は、それを許さなかった。男は沈黙を破り、彼にとっての真実を語り始めたのである。だが、それは人々の耳には届かなかつた。多くの人の目には自己弁護としか映らなかつたのである。

エ しかも、その組織は厳然たる戦闘集団である。他の組織と在り方が異なるのは自明だ。さらに言うなら、それを構成する軍人は、指揮官に生殺与奪の権があることを知り、「自らの死は鴻毛こうもうよりも軽し」などと徹底され、育てられてきた人間たちなのである。

オ そういった意味で、インパール作戦において巷間ちやうかん伝えられている、牟田口が「あと何人死ねば目標が奪取できるか」と発言した、あるいは神頼みに固執していた、という逸話は全くリアリティを感じさせない。なぜなら無形の戦闘力と呼ばれる統率に良い影響を与えることのない言葉を発する意味はなく、部隊を自壊へ向かわせるだけであるからだ。